詩歌集
（改定版）

六つ星のメッセージ

馬場　元志

☆　☆

☆　☆

☆　☆

詩歌集（改定版）

六つ星のメッセージ

馬場　元志

馬場

著者印

住所　〒七三〇
広島市中区基町二〇番一－二一七号
著者　馬場元志
電話　（〇八二）二二八－八三八九
発行所　錦紫出版
733　広島市西区庚午中二丁目十七－九
電話（〇八二）二七七－六九五四
印刷所　株式会社　ニシキプリント
733　広島市西区商工センター七丁目五－三三
定価　二、八〇〇円也
初版発行　平成三年五月
改定発行　平成八年九月

◎　落丁・落版や破損・汚染の著しい場合は、お取替え致しますので、お手数でしょうがご送付下さいますようお願い致します。

序

私が馬場元志氏と知り合ったのは、昭和五十九年三月、広島波動短歌会という同好グループが発足した当時であって、五年余りになる。

お会いしてから間もなく、氏は眼の手術などで歌会には出られなくなったが、作品はその後も月々見せてもらい、相談があった時はお応えをし、多少の作品添削も試みて来たというわけであって、この歌集のあとがきでは先生と言うように書かれているが、私の方は元よりそんなつもりは無く、信頼をよせて貰える歌友としてずっと親密な交りが続いているのである。

その馬場氏がこのたび、第二歌集「六つ星のメッセージ」を上梓(じょうし)されることは、私としても大きなよろこびであり、心より祝福申し上げる。氏は此処に収められた作品からも窺われるように、若い時からの足跡は決して平坦とは言えず、被爆体験者であり、そのためか概して病弱であって、視力障害を持つ身であられる。更に、私はまだお会いしていないが、仄聞(そくぶん)するところによると、奥さんもいつよりか全盲となられて、現在は、指圧、鍼灸師として、

日々施療にお忙しいということである。そうした言わば不遇な身上が、向けようのない情熱を短歌の世界に噴き出させたもののように、私には思われてならない。ためにその作法は、あくまで率直真摯であって、余計な技巧を弄するようなことは全く好まないのである。

氏は、私の知る限り純粋なこころの持ち主でありながら、一方容易に他を受け入れることが出来ぬように（私は一個の人間としてこれらは美徳と考えているが）極めて一徹である。それらのことは作品の上にも如実に表れていて、たとえば情愛の直叙や続出する同義語など、律儀な氏が一首の独立を重んじるゆえに外ならないと、私は見てきたのである。

また、氏が本当の努力家であることも、私が頭の下る所為であって、驚くほどの多作はその証左であり、「真樹」所属の頃には、真樹次席に推され、その作品発表の場である全国短歌大会、各神社献詠祭、新聞歌壇等いくたびも上位入選を果たし、常のように好評を得てきておられる。

収録作品を抽いて詳しく触れる余裕がないが、馬場氏自身も言うように、この集は一つの足固めであって、氏は、年齢的にもまだ多くの春秋を残して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おられるのだから、更にその真価は今後を期待しなければならないと思う。折角慈愛されて一層歌境を深められんことを祈り、併せて大方の御清覧を願う次第である。

平成三年四月

「晩鐘」同人

坂田哲男

改定の御挨拶

本著、詩歌集『六つ星のメッセージ』は、平成三年五月に発行しましたところ、予想に反し好評を得て、本が足りなくなり、多数の方々に再版を望まれておりましたが、経済的な理由で見合わせていたものです。

其の一方で読み返してみましたところ、私が視力障害者の為もあって、校正に越ち度が在り、かなり誤植が有ることに気付きました。

そこで、其の誤植の訂正を兼ね、其の後に作り溜めていた歌を加え、増頁を以て、このたび改定版を出版するはこびとなりました。

つきましては、御再読の上、またまた前回同様に、御意見御感想を御寄せ下さいますよう御願い申し上げる次第です。

尚、坂田哲男先生の御序文と、私の「あとがき」は、そのまま使わせていただくことにしました。

また、ボランティアーの木村保子様に、読み書き一切を御手伝い戴き、錦紫出版社の皆様方には引き続き大変御世話に成りました。御両方様に厚く御礼を申し上げます。

平成八年九月吉日

馬場　元志

本章

短歌

目次

序……坂田哲男
改定の御挨拶……馬場元志
本章――短歌
第一章　旅行の歌
みちのく探訪……2
沖縄戦跡……12
西海旅情……18
北海道旅行……23
信濃路観光……31
伊勢志摩紀行……38
長州路吟行……45
瀬戸内点景……52
白兎海岸吟遊記……60
宮島遊歩……66

旅先晩秋歌……71
旅先の歌（追加）……75

第二章　失明の歌
うすれゆく視界……92
ふたたび光を……112
左眼摘出……115

第三章　点筆の歌
白杖の響き……124
歌ありて……137
はてしなき追憶……151
点字の歌稿……165
天を突く杖……179

第四章　施療の歌
施療記録より……194
雨また楽し……207

街路の香り……220
第五章　徒然の歌
妻と共に……234
春陽ほのぼの……248
原爆回顧詠……263
雑感……276
病床吟……281
生き長らえて……288
付章――漢詩
漢詩弐拾篇
原爆忌即事……313
観梅……314
植物公園の展望台に登る……315
夜香木発刊十周年を賀す……316
合戦原古跡を訪う……317
妻と宮島海岸に遊ぶ……318

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宮島管絃祭……319
内裏山城趾作有り……320
厳島神社に詣る……321
縮景庭園に過ぶ……322
母の喜寿を賀し三滝山観桜……323
屋外練声会……324
青史発刊三十周年記念……325
病床苦思……326
日ノ御碕に泊す……327
鯉城を仰ぐ……328
八ヶ岳登山……329
月下友と舟遊……330
平戸島城趾感有り……331
闘病……332
あとがき……馬場元志 I
著者略歴……馬場元志 VI
表紙図案……馬場元志

第一章

旅行の歌

みちのく探訪

新聞の東北旅行案内を切り取りておく癒えて
ゆくべく

腎疾の全快ちかしと医師言えりみちのく巡り
の計画を練る

銀婚の記念とすべくカレンダーに東北旅行の予定を記(しる)す

青空に菜の花・若葉・残雪と色を重ねて津軽富士聳ゆ

四囲の山を睥睨(へいげい)したるかたちにて岩木山の嶺(ね)空に際立つ

さし交す木々の緑に染まりつつしぶく流れの
ここは奥入瀬（おいらせ）

岩に散る湯瀬渓谷の水しぶき真紅の橋を絶え
ず濡らせり

百種（ももくさ）の色まじりあい山寺の庭狭きまで盛る牡
丹花

雨雲の垂りて小暗き野沢湖は鋭くわたる風に
波立つ

独眼竜の花の歴史を語るがに青葉城趾の森に
鳥啼く

長年の思いかないて拝み観る金色堂は意外に
小さし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com